Journal of Culture and Information Science, 10（1, 2）, 9-21,（March 2015）

資料紹介

同志社大学文化情報学部蔵無名歌集

―翻字と解題（3）―

福田　智子・久野　由香子・村田　冴子

同志社大学文化情報学部蔵無名歌集（仮称『いろは和歌集』）は、和歌を句頭の文字によって、いろは順に分類･配列した歌集である。本稿では､歌頭が「つ」「ね」「な」「む」「う」の歌（「ら」の項目はない）、計 140 首（「ね」のみ 20 首､それ以外は各 30 首）について､『新編国歌大観』を対象に他出歌集を検した。その結果､『新古今集』『古今集』の歌が多数確認された。とくに新古今時代を重視する傾向があり､『山家集』『拾玉集』『壬二集』『秋篠月清集』の他､『北野宮歌合』『順徳院百首』といった作品をも視野に入れていることがわかった。また､『伊勢物語』『源氏物語』の歌を採るのも特徴のひとつであり､『伊勢物語』の歌の作者認定には、冷泉家流の古注釈が影響を及ぼしているように見受けられる。なお、12 首存する出典未詳歌については、さらなる調査が必要である。

1. はじめに

本稿は、福田智子・児玉駿介・加藤みどり「資料紹介　同志社大学文化情報学部蔵無名歌集―翻字と解題（１）―」（『文化情報学』第 9 巻第 1 号、2013 年 10 月）、同「資料紹介　同志社大学文化情報学部蔵無名歌集―翻字と解題（２）―」（『文化情報学』第 9 巻第 2 号、2014 年 3 月）の続編である。

これまで､歌頭が「い」から「そ」までの歌（「ろ」「へ」「り」「る」の項目はない）、計 361 首について､『新編国歌大観』を対象に他出歌集を検したが､本稿では引き続き､「つ」「ね」「な」「む」「う」の歌（「ら」の項目はない）、計 140 首（「ね」のみ 20 首。それ以外は各 30 首。三十七丁裏から五十丁表にあたる。）について、同様の翻字と考察をおこなう。

2. 翻字

【凡例】

①和歌本文の歌頭には､（1: い 1）というように、歌集全体の通し番号と、歌頭の文字ごとの通し番号を付す。

②本文の表記は､できるかぎり原態を生かして、通行の字体に翻字するよう努めた。歴史的仮名遣いに統一したり、私に濁点を付したりすることは避けた。

③和歌の頭注と脚注の位置に記される集付と作者名は、和歌本文の後に、（頭注 / 脚注）の順で示す。なお、どちらか片方しか記されない場合は、記述のないことを示す記号として「―」を用いる。

④他出歌集の調査範囲は、『新編国歌大観』に拠り、巻数 - 通し番号を付した歌集名の略称と歌番号を示す。

〈例〉3-19 貫之 355『新編国歌大観』第三巻 19 番目の『貫之集』355 番歌

⑤本書と他出との間に、本文異同（表記の異同は除く）のある場合は、▽を付して異同を句ごとに挙げ、歌集名と歌番号を示す。

⑥本書の和歌本文に見セ消チ・挿入記号・傍書などの書き入れがあった場合は、〔本文注記〕の項目を設け、説明を加える。なお、傍書が

見セ消チや挿入記号とともに記されている場合は、書き入れ修正後の本文を掲げる。

【翻字】
（362：つ 1）つれもなき 人にみせはや 桜花 風にしたかふ こゝろよはさを（山家抄 / 西行）
3-125 山家 597、▽［つらもなき］［風にたたかふ］10-176 言葉 157

（363：つ 2）月やあらぬ 春やむかしの 春ならぬ わか身ひとつは もとの身にして（伊勢物語古今にも / 業平）
1-1 古今 747、2-4 古六帖 2904、3-6 業平 37、5-166 俊成合 20、5-223 時代不 45、5-301 古来風 281、5-303 無名抄 47、5-304 瑩玉集 15、5-306 西行談 21、5-320 竹園抄 19、5-320 竹園抄 32、5-329 桐火桶 142、5-333 和歌無 34、5-343 正徹語 9、5-376 宝物 404、5-415 伊勢語 5、7-2 業平 34、10-177 定家八 1358、10-212 源氏注 370、10-212 源氏注 429

（364：つ 3）月夜には こぬ人またる かきくもり雨もふらなん わひつゝもねん（古今 /―）
1-1 古今 775、2-3 新撰和 286、2-4 古六帖 2829、5-325 和歌用 33、10-177 定家八 1436、 ▽［こひつつもねん］5-373 江談 6、▽［かきくらし］［こひつつもねん］5-383 十訓 122

（365：つ 4）つらからは かくは名残の をしからし 人のよきほと 身のあたはなし
未詳

（366：つ 5）つらさをは 君にならひて しりぬるか うれしき事を たれにとはまし
▽［しりぬるを］1-6 詞花 222

（367：つ 6）つまかふる 鹿そなくなる 女郎花おのかすむ野の 花としらすや（古今 / みつね）
▽［つまこふる］1-1 古今 233、2-4 古六帖 3675、5-329 桐火桶 95、7-5 躬恒 149

（368：つ 7）つれなくて やみなんのちの くやしさよ おもひはしめて えこそもらさね
〔本文注記〕第三句「くやしさに」の「に」見セ消チ。右傍書「よ」あり。
▽［くやしさに］［思ひそめても］1-21 新続古1016

（369：つ 8）つゝめとも 袖にたまらぬ しら玉は 人を見ぬめの 涙なりけり（古今 / 阿辺清行）
1-1 古今 556、2-3 新撰和 348、2-4 古六帖 2090、2-4 古六帖 3185、3-5 小町 39、5-311 八雲 32、5-332 悦目抄 71、10-177 定家八 1327

（370：つ 9）露をたに 今はかた見の 藤衣も あたにも袖を ふく嵐かな（新古今 / 定家）
1-8 新古今 789、5-223 時代不解 6、5-273 続歌仙 100、5-277 定十体 90、5-278 自讃歌 158、5-346 兼載談 110、5-385 撰集抄 44、7-81 如願 653、10-123 新三撰 360、10-177 定家八 706

（371：つ 10）つれなさを むかしにこりぬ 心こそ 人のつらきに そへてつらけれ
5-421 源氏 316、▽［人のつらさに］5-250 風葉 842

（372：つ 11）月待と 人にはいひて なかむれはなくさめかたき ゆふ暮のそら（千載 / 刑部卿範兼）
〔本文注記〕第三句「なかむれと」の「と」見セ消チ。右傍書「は」あり。
1-7 千載 873、5-223 時代不 184、10-177 定家八 1376

（373：つ 12）つれなきを 今は恋しと おもへとも こゝろよわくも おつる涙か（古今 / 忠臣）
1-1 古今 809、2-2 新撰万 225、2-3 新撰和 236、5-4 寛平后 182

（374：つ 13）月影の やとれる袖は せはくともとめても見はや あかぬひかりを（源し / 花散里）
5-249 物語合 383、5-421 源氏 174、5-444 無名草 15、▽［うつれる袖は］10-102 源氏合 73

（375：つ 14）露は袖に 物おもふ比は さそなをく かならす秋の ならいならねと（新古今 / 大上天王）
1-8 新古今 470、5-278 自讃歌 2、10-123 新三撰 6、10-177 定家八 358、10-206 歌林良 280

（376：つ 15）つゝいつゝ 井つゝにかけし まろかたけ すきにけらしな いも見さるまに（伊勢

物語 / 業平）
▽［筒井つの］5-415 伊勢語 47、▽［つつゐつの］［すぎにけらしも］［君見ざるまに］5-299 袖中抄 155

（377：つ 16）つれ〳〵の なかめにまさる 涙河 袖のみぬれて あふよしもなし（伊勢物語 古今にも / とし行）
1-1 古今 617、3-8 敏行 7、5-311 八雲 34、5-332 悦目抄 73、10-177 定家八 1124、10-180 五代枕 1318、▽［そでのみひちて］2-4 古六帖 2078、3-6 業平 25、5-415 伊勢語 183、▽［そでのみひちて］［あふよしもなみ］2-4 古六帖 458、▽［ながめにぬるる］［そでのみひちて］7-2 業平 43

（378：つ 17）月月に 月見ぬ月は なけれ共 こよひの月に にる月もなし
〔本文注記〕結句「にる月そもなし」の「そ」見セ消チ。
▽［月ごとに］［見る月なれど］［このつきの］［にる月ぞなき］1-11 続古今 1595、7-11 村上 138、▽［つきごとに］［見る月なれど］［このつきの］［にたる月ぞなき］2-15 万代 995、▽ 3-100 江帥 96［月ごとに］［見るとはすれど］［ながづきの］［しくつきぞなき］

（379：つ 18）月見はと 契りをきてし ふる里の人もやこよひ 袖ぬらすらん（新古今 / 西行）
〔本文注記〕第三句「契りていてし」の「ていて」見セ消チ。右傍書「をきて」あり。
1-8 新古今 938、2-13 玄玉 218、3-126 西行家 186、5-172 御裳濯 40、5-277 定十体 226、5-278 自讃歌 165、5-386 西行文 125、6-6 御裳集 424、10-177 定家八 827

（380：つ 19）つゐに行 道とはかねて きゝしかと きのふけふとは おもはさりしを（伊勢物語 / 業平）
1-1 古今 861、3-6 業平 82、5-291 俊頼髄 95、5-329 桐火桶 144、5-415 伊勢語 209、5-416 大和 275、10-177 定家八 711、10-211 伊勢注 141、10-212 源氏注 266、10-212 源氏注 326、▽［みちとはききし］［ものなれど］6-4 如意宝 50、7-2 業平 67

（381：つ 20）月影に 鹿の音きこゆ 高砂の おのへの萩の 花やちるらん
1-11 続古今 453、3-32 兼盛 188、10-181 歌枕名 8102

（382：つ 21）つのくめる あしの若葉を はむ駒の あるゝはみるや 難波江の人
4-26 堀河百 177、10-181 歌枕名 3551

（383：つ 22）つゝめとも かくれぬ物は 夏むしの身よりあまれる おもひなりけり
1-2 後撰 209、2-6 和漢朗 191、5-277 定十体 57、5-293 童蒙 832、5-301 古来風 312、5-304 瑩玉集 19、5-307 近代秀 82、5-314 詠歌一 56、5-381 世継語 33、5-382 今物語 7、5-383 十訓 187、5-385 撰集抄 6、5-416 大和 53、10-177 定家八 994、10-178 八代秀 11

（384：つ 23）つくはねの 峯よりをつる みなの川 恋そつもりて ふちとなりける（百人一首 / 陽成院）
1-2 後撰 776、5-275 百人秀 12、10-177 定家八 963、10-181 歌枕名 5613、10-181 歌枕名 5639、10-210 古今注 617、10-212 源氏注 133、▽［ふちとなりけん］10-180 五代枕 1373、▽［ふちとなりぬる］5-276 百人首 13、▽［こひぞたまりて］2-4 古六帖 1549

（385：つ 24）月影の 入ぬるあとに おもふかな まよわんやみの 行末のそら
1-7 千載 1021、3-131 拾玉 443、5-177 慈鎮合 15

（386：つ 25）月を思ふ 秋の名残の ゆふ暮に 木かけふきはらふ 山おろしの風（拾玉抄 / 慈圓）
1-9 新勅撰 390、3-131 拾玉 3026、5-177 慈鎮合 48、7-74 無名 51

（387：つ 26）月影の 身にしむ音と なるものは 光をわくる みねの松かせ
3-131 拾玉 1370、5-177 慈鎮合 169、5-183 三百六 342、▽［ひかりをおくる］2-15 万代 2897

（388：つ 27）月さゆる みたらし河に 影見えて 氷にすれる 山あひのそて（新古今 / 俊成）
1-8 新古今 1889、2-13 玄玉 6、3-129 長秋 644、5-177 慈鎮合 173、5-183 三百六 552、10-177 定家八 1767、10-181 歌枕名 141、▽［氷にすめる］5-258 文治女 256

（389：つ 28）月ともに 秋はすみこし 山おろしの おくる木の葉は 道やまとはん
▽［月と共に］［山おろし］［おくの木の葉は］5-201 北野合 22

（390：つ 29）月見よと 軒はの荻の 音せすは さてもねぬへき 秋のね覚を
10-21 順徳百 44

（391：つ 30）つくは山 はやましけ山 しけゝれと おもひ入には さはらさりけり（新古今/重之）
1-8 新古今 1013、5-166 俊成合 66、5-223 時代不 227、10-177 定家八 839、10-181 歌枕名 5592、10-210 古今注 643、10-212 源氏注 192、10-212 源氏注 956、▽ 3-35 重之 308［さやましげ山］

（392：ね 1）ね覚する 夜半のうつみ火 かきのけて とふはひうらも うき身なりけり（拾玉抄 / 慈圓）
3-131 拾玉 558

（393：ね 2）ねては又 おきつの濱も 白波の 暁かけて たつそなくなる（壬二抄 / 家隆）
3-132 壬二 2691

（394：ね 3）ね覚して 物思ふ宿の あり明に 月かけわたる 鴫のはねかき（拾玉抄 / 慈圓）
▽［月かげわくる］3-131 拾玉 582、5-183 三百六 563

（395：ね 4）ねてもみゆ ねても見えけり 大かたは うつせみの世そ 夢には有ける（古今/友則）
1-1 古今 833、2-3 新撰和 168、3-11 友則 63、5-292 綺語抄 105、10-177 定家八 638、▽［ねてもみる］2-4 古六帖 2470

（396：ね 5）ねき事を さのみきゝけむ やしろこそ はてはなけきの 森となるらめ（同 / さぬき）
1-1 古今 1055、6-31 題林愚 10115、10-181 歌枕名 9481、10-212 源氏注 1462、▽［杜と成りけれ］10-212 源氏注 1652

（397：ね 6）ねても見ゆ ねても見えけり 桜花はかなき春の 夢の枕や（壬二抄 / 家隆）
▽［ゐてもみえけり］［はかなの春の］3-132 壬二 1802

（398：ね 7）ねてもまた さめてもつらき 世中に あるかひもなき 我すまひかな
未詳

（399：ね 8）ねをなけは 袖はくちても うせぬめり 猶うき事そ つきせさりける（千載 / 和泉式部）
〔本文注記〕結句「つきせさりけれ」の「れ」見セ消チ。下方に傍書「る」あり。
1-7 千載 905、3-73 和泉集 369、10-177 定家八 1335、▽［ねになけば］［身のうき時ぞ］3-73 和泉集 281

（400：ね 9）ねになきて ひちにしかとも 春雨に ぬれにし袖と とわはこたえん（古今 / 大江千里）
1-1 古今 577、10-212 源氏注 1035

（401：ね 10）ねぬる夜の 程なき夢そ しられぬる 春の枕に のこるともし火（月清抄 / 後京極）
3-130 月清 1027、▽［はるのさくらに］2-15 万代 146、▽［しられける］5-178 後京極 8

（402：ね 11）ねかはくは 花のもとにて 春しなん その二月の もち月のころ（新古今 / 西行）
3-126 西行家 52、5-172 御裳濯 13、5-384 著聞 259、5-386 西行文 214、5-387 西行阿 52、10-221 ふぢ河 61、▽［花のしたにて］1-8 新古今 1993、1-11 続古今 1527、3-125 山家 77、3-129 長秋 651、5-346 兼載談 55、6-27 六華集 222

（403：ね 12）ねぬる夜の 夢をはかなみ まとろめは いやはかなくも なりまさるかな（伊勢物語 古今にも / 業平）
〔本文注記〕第四句「いやはかなくも」の「く」の右に「イに」あり。
▽［いやはかなにも］1-1 古今 644、2-4 古六帖 2030、3-6 業平 50、5-304 瑩玉集 16、5-329 桐火桶 143、5-415 伊勢語 179、7-2 業平 16、10-177 定家八 1230

（404：ね 13）ねのひして 君さかへぬる ためしには けふの御幸を 世には残さん
1-11 続古今 25、▽［よのさかゆべき］3-32 兼盛 1

（405：ね 14）子日する まかきのうちの 小松原千代をはよその 物とやは見る（新古今 /「通俊」

の「通」墨消。「俊」の左に「信」を書き、墨消。「通俊」の右に「経信」)
〔本文注記〕第二句「まかきのうちの」の「ま」の右に「御イ」あり。
▽［みかきのうちの］［千代をばほかの］1-8 新古今 728、2-10 続詞花 7、3-96 経信 2、▽［みかきがうちの］［ちよをばほかの］6-16 和漢兼 26

(406：ね 15) ね覚して ひさしくなりぬ 秋の夜は あけやしぬらん 鹿そなくなる
1-8 新古今 447、6-12 別兼作 486、7-27 道済 20

(407：ね 16) ね覚する 袖さへさむし 秋の夜の 嵐ふくなり 松むしの聲（新古今 / 大江嘉言）
〔本文注記〕初句「ね覚さへ」の「さへ」見セ消チ。右傍書「する」あり。第二句「袖さへさむし」の「し」の右に「くイ」あり。
▽［袖さへさむく］1-8 新古今 511、3-70 嘉言 150

(408：ね 17) ねさめする 長月の夜の 床さむみ 今朝ふく風に 霜やをくらん（同 / 公継）
1-8 新古今 519、5-197 千五百 1536

(409：ね 18) ねかわくは しはし闇路に やすらひて かゝけやせまし 法のともし火（同 / 慈圓）
1-8 新古今 1931、5-177 慈鎮合 97、5-223 時代不 36、10-123 新三撰 169、10-177 定家八 1787

(410：ね 19) ね覚する 身を吹とをす 風の音を むかしは袖の よそにきゝけん(新古今 / 和泉式部)
▽［風のおとに］1-8 新古今 783、▽［むかしはみみの］2-10 続詞花 625、3-74 和泉続 145

(411：ね 20) 子日する 野邊に小松の なかりせは 千代のためしに 何をひかまし
1-3 拾遺集 23、1-3' 拾遺抄 20、2-4 古六帖 42、2-5 金玉 8、2-6 和漢朗 31、3-13 忠岑 168、3-23 忠見 85、5-251 秘蔵抄 5、5-266 三十人 108、5-267 三十六 128、5-268 深窓秘 13

(412：な 1) 中〳〵に 君に恨は なかりけり 見初しよりの 日こそつらけれ
未詳

(413：な 2) 鳴からに おもひ出すそ ほとゝきす 別しこその けふとおもへは
未詳

(414：な 3) 涙河 身もうきぬへき ね覚かな はかなき夢 名残はかりに（新古今 / 寂蓮法師）
▽［はかなき夢の］1-8 新古今 1386、4-10 寂蓮 60、10-177 定家八 1226

(415：な 4) なかめつる けふは昔に なりぬとも のきはの梅よ われをはするな（新古今 / 式子内親王）
10-123 新三撰 72、10-177 定家八 55、▽［軒ばの梅は］1-8 新古今 52、4-1 式子 209、4-10 寂蓮 125、4-31 正治初 211、5-183 三百六 60、5-277 定十体 230、5-278 自讃歌 12

(416：な 5) 何事も かわりはてたる 世中を しらてや雪の しろくふるらん
未詳

(417：な 6) なにゆへに 遠さかり行 契りそと 心にとへは 人めなりけり
1-16 続後拾 894

(418：な 7) 中〳〵に 里ちかくこそ なりにけれ あまりに山の おくをたつねて
未詳

(419：な 8) 詠めわひぬ それとはなしに 物そ思ふ 雲のはたての ゆふ暮の空（新古今 / 通光）
5-278 自讃歌 46、10-123 新三撰 119、10-177 定家八 1074、▽［ながめわび］1-8 新古今 1106

(420：な 9) なき人の かた見の雲や しほるらん 夕の雨に いろは見えねと（同 / 大上天王）
1-8 新古今 803、4-18 後鳥羽 1683、5-278 自讃歌 10、5-307 近代秀 61、5-308 詠歌大 71、6-31 題林愚 9699、10-177 定家八 709

(421：な 10) 涙河 たきつこゝろの はやきせを しからみかけて せく袖そなき（新古今 / 二條院讃岐）
〔本文注記〕結句「せく袖そなき」に左傍書「床もかなイ」あり。
1-8 新古今 1120、4-31 正治初 1982、10-177 定家八 937

（422：な 11）なき名たつ 人さえ世には ある物を 君かふる身と しられぬそうき
▽［人だによには］［きみこふるみと］1-4 後拾遺 613

（423：な 12）なくさめて 帰ると人の おもふらん さひしさまさる 山里の暮
未詳

（424：な 13）夏の夜の ふすかとすれは ほとゝきす 鳴ひと聲に あくるしのゝめ（古今/つら之）
1-1 古今 156、2-2 新撰万 51、2-4 古六帖 4425、2-6 和漢朗 155、5-5 寛平中 9、5-266 三十人 15、5-267 三十六 14、5-299 袖中抄 729、6-3 継色紙 3、10-177 定家八 236、▽［なつの夜は］2-3 新撰和 137、5-4 寛平后 46、5-298 人麻勘 37

（425：な 14）無名そと 人にはいひて ありぬへし こゝろのとはは いかゝこたえん
1-2 後撰 725、5-291 俊頼髄 146、5-295 袋草紙 131、10-177 定家八 1113、10-212 源氏注 240、10-212 源氏注 282、▽［人にもいひて］5-346 兼載談 29、▽［やみなまし］5-332 悦目抄 99

（426：な 15）夏草の 露分ころも きもせぬになとわか袖の かはく時なき（新古今 / 人麿）
1-8 新古今 1375、10-177 定家八 1257、▽［わがころもでの］2-4 古六帖 3291、▽［きぬものを］［などかわが袖の］3-1 人丸 73、▽［わがころもでの］［ひるときもなき］10-210 古今注 581、▽［我が衣手の］［ひる時もなし］5-300 六陳状 84、▽［つけなくに］［わがころもでの］［ふるときもなき］2-1 万葉 1998、▽［まだきぬに］［わがころもでは］［ひるよしもなし］3-2 赤人 267

（427：な 16）なけきつゝ ひとりぬる夜の 明ぬるは いかにひさしき 物とかはしる（百人一首 / 藤原道綱母）
▽［あくるまは］1-3 拾遺集 912、1-3' 拾遺抄 268、2-7 玄玄 13、5-52 前十五 23、5-223 時代不 205、5-275 百人秀 56、5-276 百人首 53、5-301 古来風 378、5-355 大鏡 55、5-390 蜻蛉記 27、10-124 女房合 32、10-177 定家八 1086、▽［うらみつつ］［あくるまは］5-268 深窓秘 99

（428：な 17）なからへて かわる心を みんよりは あふにいのちを かえてましかは（千載 / 摂政前右大臣）
〔本文注記〕第二句「つらき心を」の「つらき」見セ消チ。右傍書「かわる」あり。結句「かえてましやは」の「や」見セ消チ。右傍書「か」あり。
▽［みるよりは］［かへてましやは］5-223 時代不 84、▽［みるよりも］［あふに命を］1-7 千載 881

（429：な 18）涙河 なにみなかみを たつねけん 物おもふ時の わか身なりけり（古今 /—）
1-1 古今 511、5-293 童蒙 328、10-177 定家八 941、10-180 五代枕 1313、10-181 歌枕名 4878

（430：な 19）涙川 枕なかるゝ うきねには 夢もさたかに 見えすそありける（同 /—）
1-1 古今 527、10-177 定家八 1225、10-180 五代枕 1314、10-196 色葉和 497、10-212 源氏注 651、10-212 源氏注 814

（431：な 20）なかむるに 物をもふ事の なくさむは 月はうき世の 外よりや行（—/ 大江為基）
1-3 拾遺集 434、1-3' 拾遺抄 499、2-8 新撰朗 244、5-53 後十五 21、6-12 別兼作 467、10-177 定家八 1597、▽［わするるは］2-7 玄玄 26

（432：な 21）なかむらん おなし雲ゐを なかむるは おもひもをなし おもひなるらん（源し / あかし入道）
5-421 源氏 225

（433：な 22）なかしとも おもひそはてぬ 昔より あふ人からの 秋の夜なれは（古今 / みつね）
1-1 古今 636、2-4 古六帖 2724、2-8 新撰朗 221、3-5 小町 13、3-12 躬恒 452、7-5 躬恒 321、10-211 伊勢注 256、10-212 源氏注 341、▽［思ひもはてぬ］10-177 定家八 1062

（434：な 23）長き世の 恨を人に のこしても かつは心を あたとしらなん
5-421 源氏 149

（435：な 24）夏の夜は またよひなから 明ぬるを 雲のいつくに 月やとるらん（古今 / ふかやふ）
5-223 時代不 139、5-275 百人秀 33、5-276 百人

首 36、5-325 和歌用 9、▽［夏の夜の］5-270 後六々 78、▽［雲のいづこに］1-1 古今 166、2-4 古六帖 289、3-39 深養父 11、5-329 桐火桶 71、5-335 井蛙 144

（436：な 25）なけきつゝ 我世はかくて すくせとや むねのあくへき 時そともなく
5-249 物語合 33、5-421 源氏 147

（437：な 26）なからへは 又この比や しのはれん うしと見し世そ 今は恋しき（新古今 / 清輔）
1-8 新古今 1843、3-115 清輔 400、5-165 治承合 10、5-271 歌仙落 46、5-272 中古六 118、5-275 百人秀 84、5-276 百人首 84、5-277 定十体 94、5-307 近代秀 18、5-307 近代秀 106、5-328 三五記 68、5-329 桐火桶 168、5-335 井蛙 24、10-177 定家八 1558

（438：な 27）なけけとて 月やは物を おもはする かこちかほなる 我か涙かな（百人一首 千載にも / 西行）
1-7 千載 929、3-125 山家 628、3-126 西行家 353、5-172 御裳濯 55、5-223 時代不 22、5-275 百人秀 88、5-276 百人首 86、5-307 近代秀 100、5-308 詠歌大 103、6-31 題林愚 7359、10-177 定家八 1364、10-178 八代秀 68、▽［かこちがましき］6-27 六華集 770

（439：な 28）名にしおわゝ いさ事とわん 都鳥 我かおもふ人は ありやなしやと（伊勢物語 / 古今にも 業平）
1-1 古今 411、2-3 新撰和 194、2-4 古六帖 1244、3-6 業平 81、5-264 和十種 40、5-362 平家延 153、5-374 今昔 85、5-415 伊勢語 13、7-2 業平 25、10-177 定家八 795、10-181 歌枕名 5497、10-212 源氏注 1000

（440：な 29）中そらに たちいる雲の 跡もなく 身のはかなくも なりにけるかな
5-415 伊勢語 42、▽［なりぬべきかな］1-8 新古今 1370、5-415 伊勢語 216

（441：な 30）涙河 身もうくはかり なかるれと きえぬは人の おもひなりけり（新古今 / 元真）
1-8 新古今 1060、5-277 定十体 253、10-177 定家八 1332、▽［身のうくばかり］3-28 元真 303

（442：む 1）むしの音の ひとつ聲にも 聞えぬは こゝろ〳〵に ものおもふらん
▽［なくむしの］［ものやかなしき］1-6 詞花 120、2-9 後葉 144、3-73 和泉集 136、3-73 和泉集 861

（443：む 2）昔おもふ 草の廬の 夜るの雨に 涙なそへそ 山ほとゝきす（新古今 / 俊成）
1-8 新古今 201、3-129 長秋 513、5-277 定十体 10、5-278 自讃歌 61、5-329 桐火桶 172、6-27 六華集 360、10-185 三百六 118、10-206 歌林良 189

（444：む 3）むかし見し 春は昔の 春なから 我か身ひとつの あらすもあるかな（同 / ふかやふ）
1-8 新古今 1450、3-39 深養父 37、▽［我が身ひとりの］10-211 伊勢注 201

（445：む 4）村雨の 露もまたひぬ まきの葉に 霧たちのほる 秋のゆふ暮（百人一首 / 寂蓮法師）
1-8 新古今 491、4-10 寂蓮 289、5-184 老若合 249、5-275 百人秀 93、5-276 百人首 87、5-277 定十体 167、5-278 自讃歌 144、5-304 瑩玉集 14、5-328 三五記 157、10-177 定家八 392

（446：む 5）むかしより はなれかたきは うき世かな かたみにしのふ 中ならねとも（新古今 / 入道前関白太政大臣）
1-8 新古今 1832、10-177 定家八 1571

（447：む 6）梅か枝に きいる鶯 春かけて なけともいまた 雪はふりつゝ（古今 /—）
1-1 古今 5、2-3 新撰和 19、2-4 古六帖 4401、5-264 和十種 41、5-265 和十体 17、5-277 定十体 212、5-294 奥儀 121、5-301 古来風 219、5-335 井蛙 128、10-177 定家八 31、10-196 色葉和 108、10-212 源氏注 228、10-212 源氏注 980、10-212 源氏注 1745、▽［来ぬるうぐひす］10-206 歌林良 166

（448：む 7）むつましと 君はしらすや 水かきの ひさしき世より いわひ初てき（新古今 / 住吉の御哥）
5-294 奥儀 3、5-295 袋草紙 206、▽［君はしら浪］1-8 新古今 1857、5-415 伊勢語 199、10-177 定家八 1751、10-181 歌枕名 3957、10-210 古今注 4、10-210 古今注 367、10-210 古今注 398、▽［君はしら波］［みつ汐の］10-210 古今注 736

（449：む 8）むらさきの 一本ゆへに むさし野の 草はみなから あわれとそ見る（古今 /—）
〔本文注記〕下句「なへての花の なつかしきかな」見セ消チ。右傍書「草はみなから あわれとそ見る」あり。
1-1 古今 867、5-296 和歌初 134、10-177 定家八 1462、10-181 歌枕名 5411、10-211 伊勢注 47、10-212 源氏注 959、10-212 源氏注 1182、▽［あはれとぞ思ふ］5-294 奥儀 290、10-206 歌林良 352、10-212 源氏注 1434、▽［のをむつましみ］［あはれとぞおもふ］10-212 源氏注 324、▽［くさはなべても］［なつかしきかな］2-4 古六帖 3500、▽［なべての草の］［なつかしきかな］10-210 古今注 659

（450：む 9）むらさきの 色はこゝろに あらねとも ふかくそ人を おもひそめぬる
▽［色に心は］［おもひそめつる］1-8 新古今 995、5-223 時代不 81、10-212 源氏注 1528

（451：む 10）むは玉の 夜るのころもを たちなから 帰る物とは 今そしりぬる
1-8 新古今 1175

（452：む 11）むさし野は けふはなやきそ わか草の つまもこもれり 我もこもれり（伊勢物語 / 二条の后）
5-291 俊頼髄 410、5-299 袖中抄 183、5-362 平家延 101、5-415 伊勢語 17、10-181 歌枕名 5420、10-196 色葉和 447、▽［かすがのは］1-1 古今 17、5-293 童蒙 309、10-177 定家八 39、10-180 五代枕 671、10-181 歌枕名 1762

（453：む 12）むさしあふみ さすかにかけて たのむには とはぬもつらし とふもうるさし（同 / 四条の后）
5-415 伊勢語 18、▽［おもふには］5-333 和歌無 27、10-212 源氏注 1121

（454：む 13）梅花 にほひをうつす 袖のうへに 軒もる月の かけそあらそふ（新古今 / 定家）
1-8 新古今 44、3-133 拾遺愚 906、4-31 正治初 1309

（455：む 14）梅か香に むかしをとへは 春の月 こたへぬかけそ 袖にうつれる（新古今 / 家隆）
1-8 新古今 45、4-31 正治初 1409、5-217 家隆合 9、10-177 定家八 50、▽［むめがえに］5-183 三百六 56、▽［袖にうつろふ］3-132 壬二 406

（456：む 15）梅のはな たか袖ふれし 匂ひそと 春やむかしの 月にとははや（同 / 通具）
1-8 新古今 46、5-197 千五百 134、5-278 自讃歌 51、5-273 続歌仙 3、5-329 桐火桶 197、10-123 新三撰 181、10-206 歌林良 163、10-210 古今注 261

（457：む 16）梅の花 あかぬ色香も むかしにて おなしかたみの 春の夜の月（新古今 / 俊成女）
1-8 新古今 47、4-19 俊成女 184、5-197 千五百 154、5-278 自讃歌 71、5-273 続歌仙 101、10-123 新三撰 211

（458：む 17）むすふ手に かけみたれゆく 山の井の あかても月の かたふきにけり（同 / 慈圓）
10-206 歌林良 117
▽［かたぶきにける］1-8 新古今 258、3-131 拾玉 5751、5-184 老若合 173

（459：む 18）むさし野や 行とも秋の はてそなき いかなる風の すゑにふくらん（新古今 / 通光）
5-277 定十体 121、5-278 自讃歌 42、5-328 三五記 115、10-123 新三撰 114、10-181 歌枕名 5421、▽［いかなる風か］1-8 新古今 378、▽［むさしのは］5-385 撰集抄 43

（460：む 19）梅ちらす 風もこえてや 吹つらん かほれる雪の 袖にみたるゝ（同 /—）
1-8 新古今 50、5-319 和歌口 209、▽［風もさえてや］3-99 康資母 47、▽［かはれる雪の］6-31 題林愚 486

（461：む 20）むしの音も なかき夜あかす 古郷に なをおもひそふ 春かせそふく（同 / 家隆）
▽［長きよあかぬ］［松かぜぞふく］1-8 新古今 473、3-132 壬二 1664、4-41 御五十 572、5-217 家隆合 71、5-277 定十体 9、10-177 定家八 350、10-206 歌林良 83

（462：む 21）村雲や かりのはかせに 晴ぬらん 聲きく空に すめる月かけ
1-8 新古今 504

（463：む 22）むかしおもふ さ夜のね覚の 床さえて 涙もこほる 袖のうへかな（新古今/守覚法）
1-8 新古今 629、4-2 守覚解 70、6-31 題林愚 5443、▽［涙に氷る］4-31 正治初 372

（464：む 23）昔みし 雲ゐをめくる 秋の月 今いくとせか 袖にやとさん（同 / 讃岐）
1-8 新古今 1512、4-31 正治初 1950、10-177 定家八 1613

（465：む 24）梅の花 それとも見えす ひさかたの あまきる雪の なへてふれゝは（古今 / 人麿）
1-1 古今 334、1-3 拾遺集 12、3-1 人丸 170、5-264 和十種 32、5-265 和十体 14、5-266 三十人 3、5-267 三十六 3、5-268 深窓秘 8、5-292 綺語抄 65、5-294 奥儀 118、5-297 万葉時 26、5-298 人麻勘 41、5-301 古来風 260、5-302 歌色葉 10、5-306 西行談 40、5-308 詠歌大 4、5-320 竹園抄 17、5-320 竹園抄 30、5-329 桐火桶 123、5-332 悦目抄 26、8-34 雲玉 33、10-177 定家八 43、10-205 冷口伝 12、▽［それとぞにほふ］［あまぎる雪は］［なべてふれれど］
5-320 竹園抄 31

（466：む 25）むらさきの 色こき時は めもはるに 野なる草木そ わかれさりける（伊勢物語 / 業平）
1-1 古今 868、3-6 業平 54、5-299 袖中抄 1031、5-299 袖中抄 1035、5-415 伊勢語 78、7-2 業平 56、10-177 定家八 1463、10-196 色葉和 504、10-206 歌林良 382、▽［のなるくさきも］［あはれなりけり］2-4 古六帖 3501、▽［野なる草木も］［わかれざりけり］5-294 奥儀 552

（467：む 26）むらさきの 庭の春かせ 長閑にて 花にかすめる くもの上かな（月清抄/雑 後京極）
〔本文注記〕四十七丁表1行目に下句、10行目（最終行）に上句が記される。それぞれの行末に「○」印あり。
2-16 夫木 14895、▽［しづかにて］3-130 月清 176

（468：む 27）むかしたれ かゝる桜の 花を植てよし野を春の 山となしけん（月清抄 / 後京極）
1-9 新勅撰 58、2-13 玄玉 495、3-130 月清 1、5-178 後京極 19、6-16 和漢兼 219、10-123 新三撰 84、▽［たねをうゑて］10-181 歌枕名 2033

（469：む 28）むは玉の 夜は明ぬらし あし引の 山ほとゝきす 一聲のそら（壬二抄 / 家隆）
5-259 三体和 26、▽［一こゑぞする］3-132 壬二 2995

（470：む 29）むしの音も 涙露けき 夕暮に とふ人とては 荻の上かせ（同 / 同）
3-132 壬二 2996、▽［とふ物とては］5-259 三体和 27

（471：む 30）昔より 物をもふ人や なからましこゝろにかなふ なけきなりせは（山家抄 / 西行）
3-126 西行家 336

（472：う 1）恨むまし 世をも人をも 中くに 時にあはぬを 身のとかにして
未詳

（473：う 2）うき世かな とまりさためぬ 松嶋に ゆふ波ちとり そらになく聲
未詳

（474：う 3）うき草の うへはしけれる ふちなれや ふかきこゝろを しる人のなき
1-1 古今 538、10-177 定家八 857

（475：う 4）打返し あふと見つるを うつゝにて さむるおもひを 夢になさはや（拾玉抄/慈圓）
3-131 拾玉 4374

（476：う 5）うな原や おつるさほこの 露もろし 國とならすは 恋もなからん
▽［あまの御ほこの］［露もうし］［恋やなからん］
8-10 草根 8300

（477：う 6）恨みても かひなき物は 鳥へ野と まくつか原に すてられし身は
未詳

（478：う 7）うらみわひ ひとりふせやに 夜もすから おつる涙や おとなせのたき
▽［こひわびて］［おとなしのたき］1-6 詞花 232、3-104 俊忠集 44、10-181 歌枕名 8448

（479：う 8）恨みても かひある程の 中ならは 猶いかはかり うきをしらせん

未詳

（480：う 9）うらみても なきてもいはん 方もなし かゝみにみゆる かけならすして（—/ 興風）
▽［方ぞなき］1-1 古今 814、3-10 興風 16、10-212 源氏注 520、▽［かたぞなき］［鏡にうつる］10-177 定家八 1425

（481：う 10）うたゝねに 恋しき人を みてしより 夢てふ物は たのみ初てき（古今 / 小町）
1-1 古今 553、2-4 古六帖 2076、3-5 小町 17、10-177 定家八 1215

（482：う 11）うきも猶 むかしの事と をもわすは いかにこの世を 恨みはてまし（新古今 / 二條院讃岐）
▽［むかしのゆゑと］1-8 新古今 1965、5-384 著聞 109、5-388 沙石 3、10-177 定家八 1804、▽［むかしゆゑぞと］5-383 十訓 149

（483：う 12）うつせみの はにをく露の 木かくれて しのひ〳〵に ぬるゝ袖かな（源し / うつせみ）
3-15 伊勢集 442、5-249 物語合 37、5-250 風葉 1083、5-421 源氏 25、10-102 源氏合 99、10-206 歌林良 106、10-211 伊勢注 182、▽［啼く蝉の］［木がくれに］10-185 三百六 184

（484：う 13）うき世をは 今そ別るゝ とゝまらん 名をはたゝすの 神にまかせて（同 / 源し）
5-249 物語合 89、5-250 風葉 465、5-421 源氏 181、5-444 無名草 13

（485：う 14）うつろひし 心の花に 春暮て 人も木末に あきかせそふく（月清抄 / 後京極）
〔本文注記〕第四句「人の木末に」の「の」見セ消チ。右傍書「も」あり。
1-9 新勅撰 1010、3-130 月清 474、5-178 後京極 137

（486：う 15）うつせみの 世はうき物と しりにしを またことの葉に かゝるいのちよ
5-421 源氏 38

（487：う 16）うき世かな 月にむら雲 花に風 おもふに別 をもはぬにそふ
〔本文注記〕結句「をもはにそふ」の「は」と「に」の間に挿入記号。右傍書「ぬ」あり。
未詳

（488：う 17）うき雲は たちかくせとも 隙もりて 空行月の みえすもあるかな（新古今 / 伊勢大輔）
▽［みえもするかな］1-8 新古今 1502、3-86 伊大輔 87、▽［かげをみるかな］7-32 伊大輔 7

（489：う 18）うき身世に なからへは猶 おもひ出よ たもとにちかき あり明の月（同 / 藤原経通）
〔本文注記〕第四句「たもとに契る」の「契る」見セ消チ。右傍書「ちかき」あり。
6-31 題林愚 9543、▽［袂に契る］1-8 新古今 1513、▽［ながらへば又］［たもとにちぎる］5-273 続歌仙 20

（490：う 19）うつろふは こゝろの外の 秋なれは 今はよそにそ 菊の上露（同 / 冷泉院）
▽［菊の上のつゆ］1-8 新古今 1575、7-23 冷泉院 12

（491：う 20）うれしさは わすれやはする 忍ふ草 しのふる物を あきのゆふ暮（同 / 伊勢大輔）
1-8 新古今 1732

（492：う 21）うしといひて 世をひたふるに そむかねは 物をもひしらぬ 身とやなりなん（同 / 清原元輔）
1-8 新古今 1743、▽［世をひたすらに］3-31 元輔 214、5-166 俊成合 84、5-223 時代不 221

（493：う 22）うけかたき 人のすかたに うかひ出て こりすやたれも 又しつむへき（同 / 西行）
〔本文注記〕結句「又うらむへき」の「うら」見セ消チ。右傍書「しつ」あり。
1-8 新古今 1751、5-387 西行阿 25、10-177 定家八 1523、▽［うかみいでて］3-127 聞書 201、▽［又しづむらん］3-126 西行家 674、5-386 西行文 28

（494：う 23）うちたえて 世にふる身には あらねとも あらぬすちにも つみそかなしき（同 / 慈圓）
1-8 新古今 1756、▽［よにすむ身には］［なけれども］3-131 拾玉 3056

（495：う 24）うきしつみ こん世はさても いかにそと こゝろにとひて こたへかねぬる（同 / 後京極）
1-8 新古今 1765、3-130 月清 898、5-197 千五百 2944、10-177 定家八 1566

（496：う 25）うきなから 猶をしまるゝ いのちかな のちの世とても たのみなけれは（同 / 源師光）
1-8 新古今 1772、4-6 師光 102、5-156 清輔合 66、5-165 治承合 287、5-183 三百六 678、5-235 新時代 144、5-376 宝物 75

（497：う 26）うき世出し 月日のかけの めくりきて かはらぬみちを 又てらすらん（新古今 / 慈圓）
〔本文注記〕結句「又てらすらん」の「らん」の右に「かなイ」あり。
1-8 新古今 1784、5-177 慈鎮合 180

（498：う 27）うたゝねは 沖ふく風に おとろけと なかき夢路そ さむる時なき（同 / 崇徳院）
1-8 新古今 1804、5-223 時代不 156

（499：う 28）憂なから 久しくそ世を 過にけるあはれやかけし 住吉のまつ（新古今 / 俊成）
1-8 新古今 1793、7-67 長秋草 50、10-6 俊五社 382、10-181 歌枕名 3840、▽［久敷世をぞ］2-13 玄玉 40

（500：う 29）うき世をは 出る日ことに いとへとも いつかは月の いりかたを見ん（同 / 八條院高倉）
1-8 新古今 1841、10-123 新三撰 207、10-177 定家八 1573、▽［うき身をば］［いるかたを見む］5-277 定十体 138

（501：う 30）うれしさも あわれもいかゝ こたへまし ふる里人に とはれましかは（同 /—）
▽［あはれもいかに］1-8 新古今 1873

３. 解題

歌頭が「つ」「な」「む」「う」の各 30 首と「ね」20 首、あわせて 140 首のうち、和歌本文に対する見セ消チ、挿入記号、傍書などの注記は、17 首の歌に見られる。見セ消チを伴う傍書が、他出歌集の本文と一致する例は、（372：つ 11）（379：つ 18）（399：ね 8）（428：な 17）（485：う 14）（493：う 22）の六例を数え、また、見セ消チはなく、「イ……」あるいは「……イ」という形式で記された異文の傍書が、他出歌集の本文と一致する例も、（403：ね 12）（405：ね 14）（407：ね 16）の三例ある。だが、傍書ではなく、見セ消チにした本文の方が、他出歌集の本文と一致する箇所も、（368：つ 7）（378：つ 17）（407：ね 16）の三例見え、さらに、（489：う 18）では、見セ消チ本文と傍書、それぞれに一致する他出歌集が存する他、異文傍書の出自が確認できない例も、（421：な 10）（497：う 26）の二例ある。本書の撰歌材料を想定する時、一筋縄ではいかない状況が浮かび上がってくる。

なお、（449：む 8）では、下句全体の文字の上に線を引いて抹消し、その右に全く異なる句を書き記している。傍書を生かせば『古今集』867 番歌本文となるが、消された下句本文に酷似するのは、『古今和歌六帖』や『新編国歌大観』所収「古今和歌集古注釈書引用和歌」中の『大江広貞注』（為相注。南北朝期成立。京都大学国語国文資料叢書を底本とする。）であり、本書の書写者が属する文化圏を推測する一助になるかもしれない。

また、（467：む 26）の歌は、四十七丁表一行目に下句、最終行の十行目に上句が書かれている。そうすると、当該面の最終行まで書写してから最初の一行（上句）を書き落としたことに気付き、補ったと想定される。親本の喉（綴じ目）が開きにくかった、あるいは、余白が少なかったために生じた脱落か。とすれば、親本も本書と同じく、一面十行、一首二行書きであった可能性がある。

挿入記号は、（487：う 16）に一カ所見られる。出典未詳歌ながら、歌意を汲んでも、脱字が補える箇所である。

和歌本文の漢字表記について注意すべきは、（498：う 27）であろう。第二句「沖ふく風に」の「沖」は、「荻」字を当てるべき箇所であり、誤解によるものと推察される。あるいは、（449：む 8）の第四句「草はみなから」の「み」に「見」字を当てるのも、「見ながら」の意と解したものか。いずれにせよ、漢字表記から、当時の書写態度の一端を垣間見ることができよう。

『新編国歌大観』によって他出歌集を検すると、やはり勅撰集においては、『新古今集』（54 首）

が圧倒的に多く、次いで『古今集』（25 首）が挙げられる。『新勅撰集』（6 首）、『千載集』（5 首）をも合わせると、新古今前後の和歌が多い。一方、『万葉集』が採歌対象外であると考えられるのも、前稿までと同様である。

『新編国歌大観』の範囲内で、他出が唯一である歌には、次のようなものがある（通し番号の後に「*」を付しているものは、本文異同を有する用例）。

1-4 後拾遺（422：な 11*）
1-6 詞花（366：つ 5*）
1-8 新古今（451：む 10）（462：む 21）（491：う 20）（501：う 30*）
1-16 続後拾（417：な 6）
1-21 新続古（368：つ 7*）
3-126 西行家（471：む 30）
3-131 拾玉（392：ね 1）（475：う 4）
3-132 壬二（393：ね 2）（397：ね 6*）
5-201 北野合（389：つ 28*）
5-421 源氏（432：な 21）（434：な 23）（486：う 15）
8-10 草根 8300（476：う 5*）
10-21 順徳百（390：つ 29）

『新古今集』と『源氏物語』の用例が際立って多い他、『西行家集』『拾玉集』『壬二集』といった、いわゆる六家集中の歌への目配りも窺える。また、歌数はわずかながら、『北野宮歌合』（元久元年十一月）や『順徳院百首』といった、新古今時代、藤原定家とその周辺の歌人たちが関わった作品を視野に入れている点にも留意したい。

集付の記載は、全部で 98 箇所あり、考証の結果、すべて正確なものと見られる。ただし、前稿でも指摘したように、「山家抄」と記される歌が、『西行家集』には載ってはいるが、『新編国歌大観』所収『山家集』には収載されないという例が、本稿でも（471：む 30）の一首が見出され、若干の問題を残すことになった。

さて、集付が最も多いのは「新古今」（48 箇所）であり、本書所載の新古今歌の九割近くにのぼる。その他の集付の数は、以下のとおりである。

「古今」　16 箇所
「伊勢物語」　9 箇所
（うち「古今にも」と並記する箇所 4 箇所）
「源し」　4 箇所
「拾玉抄」　4 箇所
「壬二抄」　4 箇所
「月清抄」　4 箇所
「百人一首」　4 箇所
（うち「千載にも」と並記する箇所 1 箇所）
「千載」　3 箇所
「山家抄」　2 箇所

ここで注意しておきたいのは、本書と他出歌集とが、二首以上の歌群を、歌順もそのままに共有する場合が見られることである。すなわち、（454：む 13）から（457：む 16）の四首は、『新古今集』44 ～ 47 番に載り、また、（469：む 28）（470：む 29）の二首は、『壬二集』においてもこの順に連続して配されている。さらに、（452：む 11）（453：む 12）は、『伊勢物語』第十二・十三段に並ぶ。これらの点は、本書の撰歌材料を想定する上で、看過できないであろう。なお、『源氏物語』の四例は、それぞれ、空蝉巻（483：う 12）、須磨巻（374：つ 13）（484：う 13）、明石巻（432：な 21）の歌である。物語の始めの部分に偏っている点に留意される。

作者名は、九十三箇所に記されている。おおむね正確であり、たとえば（465：む 24）では、『古今集』の左注により作者を「人麿」とするなど、配慮が見られる。ただし、（370：つ 9）の『新古今集』789 番歌では、作者を「定家」とするが、正しくは藤原秀能である。当該歌の直前の『新古今集』788 番の作者が定家であることから、おそらく作者を見誤ったのであろう。また、（405：ね 14）では、「通俊」の「通」字を墨で消し、「俊」の左に「信」と書いてから、再度墨で消し、その後、元の「通俊」という字の右に「経信」と書いたと思しい。この場合も、当該歌は、『新古今集』728 番に作者「経信」として載るのだが、『新古今集』の次の歌、729 番歌の作者「通俊」の名を誤って記してしまったものと推察される。

『伊勢物語』の集付がある歌は、（363：つ 2）（376：つ 15）（377：つ 16）（380：つ 19）（403：ね 12）（439：な 28）（452：む 11）（453：む 12）（466：む 25）の九首を数える。これらにはすべて、作者名も明記されている。だが、作者名を物語本文からは知ることができず、また『古今集』などの他出がない、あるいは、他出があっても「読人不知」であるといった歌も存する。すなわち、376 番の「業平」

歌（つ 15）は、『伊勢物語』第二十三段の、いわゆる「筒井筒」の歌であるが、物語本文からは、「となりの男」としか出て来ない。この点について、古注釈を繙くと、書陵部本および島原文庫本『和歌知顕集』（片桐洋一氏『伊勢物語の研究〔資料篇〕』〈昭和 44 年 1 月、明治書院〉所収。）は、当該章段が古い物語であることを指摘し、従って業平のことではないとする。これに対し、『冷泉家流伊勢物語抄』『伊勢物語肖聞抄』『伊勢物語宗長聞書』『伊勢物語闕疑抄』（同書所収。）および、『十巻本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』『伊勢物語奥秘書』（以上、片桐洋一氏・山本登朗氏責任編集『伊勢物語古注釈大成』第一巻〈2004 年 10 月、笠間書院〉所収。）は、「筒井筒」の男女は、業平と有常女と明記するのである。また、452 番歌（む 11）について、『伊勢物語』第十二段の女は、「人のむすめ」として登場し、具体的に誰を指すのか判然としない。『伊勢物語肖聞抄』『伊勢物語宗長聞書』『伊勢物語闕疑抄』は、当該章段は作り物語であるとし、中でも『伊勢物語肖聞抄』は、「誰ともなし。」と指摘する。一方、本書と同様に「二条后」とするのは、書陵部本『和歌知顕集』『冷泉家流伊勢物語抄』『十巻本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』『伊勢物語奥秘書』である。なお、『延慶本平家物語』第二末（巻五）文学道念之由緒事においても、当該歌は、「二条ノ后」の歌として引用されている。さらに、（453：む 12）も、『伊勢物語』第十三段の「京なる女」の歌であるが、「女誰ともなし。」とする『伊勢物語肖聞抄』『伊勢物語宗長聞書』に対し、作者を本書と同じく「四条の后」とする古注釈書には、『冷泉家流伊勢物語抄』『十巻本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』『伊勢物語奥秘書』がある。前稿においても、本書の『伊勢物語』所収歌の作者名が、総じて冷泉家流の『伊勢物語』古注釈において見られる見解と軌を一にすることを指摘したが、本稿においても同様の傾向が指摘できるであろう。

最後に、出典未詳と考えられる歌は、（365：つ 4）（398：ね 7）（412：な 1）（413：な 2）（416：な 5）（418：な 7）（423：な 12）（472：う 1）（473：う 2）（477：う 6）（479：う 8）（487：う 16）の全部で 12 首存する。「な」および「う」で始まる歌の冒頭二首の出典が未詳という点に注意される。さらに視野を広げた出典の検討が俟たれる。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学研究科における 2014 年度春学期の授業「日本古典文学情報特論１」の内容の一部であり、また、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究所第 18 期研究会第 17 研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号 25330403、いずれも平成 25 ～ 27 年度）における研究の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM 版 Ver.2 とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器“e-CSA Ver.2.00”を使用した。